

吉野の都女楠

近松門左衛門作



往を尋ねて來れるを知る。大權聖者の未
來記見つんべし。東魚來つて四海を呑み西
鳥來つて東魚をくらひ。海内既に一に歸し
再び九五の御位。後醍醐の帝と重祚ある。
逆臣相模入道が一族滅びて後。足利治部大
輔尊氏聊が朝家を恨み奉り。東國勢を引率
し矢矧驚坂竹の下。數箇度の軍に勝誇り己
れと征夷將軍に押し成つて。帝都間近く攻
入りしを新田左中將義貞。楠判官正成。陳
平張良が肺肝よりオロシム。出でたる如き。
名大將。地命を風前の塵にかけ義を金鐵よ
り堅くして。駈破り駈惱まし千變萬化の合
戰に。さしもの尊氏終に打負け筑紫を指し
て落しほの。八重九重や都の内。ッ萬歳を
こそ唱へけれ。地時に建武三年五月十五

朝敵尊氏大友少貳を従へ。九州の軍兵五十
萬騎。兵船數千艘にて攻上り尊氏が弟直
義。山陰山陽の大勢陸路を打つて雲霞の如
く。播州の赤松敵に與し苦處の城に立籠
り。官軍を遮り候を義貞備後備中に支へ。
挑み戦ひ候間に。敵船早や須磨明石を馳越
え候と追々に注進頻なり。地天皇大きに驚
かせ給ひ。楠判官正成をオクリやがて御前
に召されける。地扱義貞が注進事急なり。
罷り向つて合戦を致すべしとの勅諭。楠
畏つて奏せしは。數年の軍に疲れたる御方
の小勢。筑紫方は新手の大勢機に乗つたる
に駈合せ。常の如くの合戦は味方打負け申
さん事決定。先づ新田殿をも召返され君は
比叡山へ臨幸なり。正成も河内に退き敵を

くにして。兵糧を留め敵軍次第に疲れ落ち
ん。所を新田殿は山門より押寄せ。正成は
搦手より攻上り真中に包んで。一蒸むす程
ならば朝敵一戦に滅びん事。正成が方寸の
内に覺え候。官軍は必ず一旦の勝負を見る
事勿れ。始終の勝こそ肝要にて候へ。縦へ
官軍百度負くとも。地正成一人生きてあ
りと聞召さば。聖運終に開かるべしと。思
召され候へとッ三世に頼もしくぞ奏しける。
地坊門の宰相清忠御殿の前につつと出で。
一戦にも及ばず河内へ退き。君を比叡山へ
臨幸なし奉れとは。命の惜しさに帝位を輕
しめ申すよな。總じて新田義貞勾當の内侍
に思ひを残し。都に心引かる、故軍手ぬる
く敵にきはひ付きたるに。御邊も河内へ引
かんとは故郷の妻子がゆかしいか。伊豫の
國の住人大森彦七盛長といふ武士。尊氏に
與するといへども某に縁ある故。裏切して
味方に力を加へんとの内通あれば。地味方

の勝利目前にて御邊等が命に。氣遣の無い
事は此の宰相が請合ふ。早々發向有るべし
と、フシ嘲り顔して申さる。地補元より私

の怒りに忠を忘れぬ良雄。いよ／＼面を和
け。御仰にては候へども其の大森彦七が内
通にて。味方勝に極らばなほ以て正成向ふ

迄も候はず。地さり乍ら詩歌管絃は殿上の
御覽賞。弓馬合戦の道は武門の諫言に任せ

られ是非に都を明け渡し敵に一旦勝を與へ
重ねて。畢竟の勝を御覽あるこそ。謀を

帷帳の中に運らし勝つ事を千里の外に顯
す。籌策にて候と子房が秘藏孔明が骨髄。

残る方なく奏せらる宰相大きに色を損じ。
御邊が言ふ迄もなく弓馬合戦の道なればこ

そ。賤しき汝等禁庭へ召さる、條有難しと
は存ぜずや。先年御邊千早赤坂の城郭に

て。六波羅の大勢を傾け相模入道亡びし
も。全く武略の手柄にあらず君の賢運天に

叶ひ。宗廟社稷の大小の神祇王法を守護
し給ふ故。殊に今度は目に見えたる勝軍。

地大森がお蔭にて手柄すべきは此の度はや
打つ立てとありければ。軍法不覺の卿相雲
客口々に。敵の内通あるからは天の與へ此

の時。是非々々補馳せ向ひ朝敵兼氏一戦に
攻め滅し。宸襟を休め奉れと。衆議一決の

勅諭は、フシうたてかりける御運なり。地正
成も此の上はさのみ申すに及ばずと。御前

を立ちけるが是ぞ最期の合戦と。思ひ定め
し忠臣の屍は及に消ゆれども。義は碎かれ

ぬ楠と。朽ちせぬ。名をこそ。三軍へ止めけ
れ。フシ元來正成。智仁勇を兼備し死を善道

に守る良將。今度の合戦味方必定負軍。討
死の時極れりと本國へも立歸らず。直に五

月十六日ありあふ手勢五百餘騎。嫡子帯刀
正行十一歳。父が馬に押並へて打ちければ。

舍弟正季一族和田の新發意源秀。同新兵衛
尉紀六左衛門恩地の左近馬物の具を。地摩か

しオリ心の花も。フシ咲きかくる。地櫻井
の宿に着きけるがまた雲凝りて五月雨の。
稍夕立と降る雨は瀧の落つるが如くにて。

人馬の足を立て兼ね。生田の森に打入れて
フシ暫く暗間を待ち居たり。雨に浪寄る毘
陽の池堤を急ぐ義笠は。早苗の賤かと思

つれば下部二人に長持昇かせ。四十餘りの
女房の雨に争ふ涙の雫。しをれ轉びて走り

来る下部ども長持どつかと下し。地工、ど
う因果の夕立や目も鼻も明かれぬ。いざ來

いあの森で少し暗して行くまいか。コレそ
こな女子殿。地長持預けた番めされと。フシ

二人は森へぞ走りける。地女とかうにかき
くれて歎き沈みて立ちけるが。思寄りある

顔つきにて長持の棒取つて捨て。石を拾ひ
てちやう／＼。叩く手先に力なき女

力も念力の。天や見通す鍵の穴錠前離れ落
ちければ。なう有難やサアお出と蓋を取る

手に縋り付き。廿歳ばかりの上蔕の涙ひま
なく息こもり。顔にばら付く亂れ髪。柳櫻

をこきまぜて。フシ水に浮めし如くなり。地
いざ下部どもの來ぬ先にと抱き出せばア、
娘しや。此の池こそ自らに菩提を勤むる功

徳池よ。其方も數珠を持つてかお肌お肌に御本
尊かけてかヲ、ほぞんかけたる時鳥。あや
めの沼は水淺しと、フシ深みを尋ねさまよひ
たる。正成馬上より遙かに見付け。あ
れく身を投ぐる女あり敵か味方かいづれ
にもせよ。源秀駆付け助けられよとありけ
れば。地承ると和田新發意睦を傳うて走り
寄る。其の丈六尺七寸古への辨慶も。あざ
むくばかり鬼の様なる赤入道。二人はあは
やと手を合せ。飛入る所を引寄せて確かと
たく。なうさうせいでも死ぬる身をせめ
て身體に疵付けず。死なせてたべと飛入る
をこれ上臈。調殺す程ならなんの止めう。
あれなるは捕判官正成物のあはれを見捨て
ぬ氣質。仔細とつくと聞届けよとの使なり
と言ひければ。地扱は補殿とや自らこそ。

あるものか。地こつちへうせうと取付く所
を源秀二人が首筋引掴み。手振で歸れば取
らるゝ命此所にて取つてくれんすと。重間
にかつばと打込めば五體を搦む菱蔓。フシ泥
に酔うてぞ失せにけり。其の隙に補親子
馬乗放し。とかういたはり給ひければ内侍
も涙にくれながら。常々夫の物語捕判官正
成は。慈悲第一の大將と聞きしに變らぬ御
情スエテ何と報じ參らせん。一年猿樂見物
の時。伊豫の國の住人大森彦七盛長とやら
ん。自らに心をかけ坊門の宰相を仲立に
て。地威勢でおどし文でぬらし。色かへ品
かへフシ口説きしを。つれなく返事も致さ
ぬ間に新田義貞の妻となりたるは。上様よ
りの勅詔天下暗れての夫婦ぞや。それに此
の度義貞西國發向の留守を窺ひ。宰相理不
盡に亂れ入り先約は大森。仲人の宰相義理
が立たぬの何のとて。無理無體に長持に押
入れて送らるゝ。なうやる方なさ乳
人が慕ひ來るとは知らず。頭も上らず息も
ならぬ長持を。搖るやら振るやら打付け廻
る其の響。胸に應へ目もくらくと幾度か
死入りし。火の車に載せて行く。フシ地獄の
迎もかくやらん。此の上のお情に我が
夫の陣屋迄。送り届けて給はれと乳人諸共
手を合せフシかきくど。きてぞ泣き給ふ。
正成打領きさこそく。我大内を出でし
より斯様の事あらんとは。宰相が言葉の色
にて察せしなり。義貞の御陣所へ送り申す
は易けれども。宰相斯くと漏れ聞かば陣場
へ女中を召されしと悪し様に奏聞し。叡慮
を以て御夫婦の仲を裂かば御恥辱を招くに
似たり。それく源秀是より都へ御供し。
立憲法印に預け參らせよ。道中人に悟られ
ぬ用心第一。とくくとありければ合點合
點智略はお家。勸學院の雀任せておけと小
躍りして。郎黨二人が具足を脱がせ長持に
入れ禱さし通し撥はせて。これ内侍様も
乳人御も慮外ながら下女にして。我等は又
此の體と地内侍の禰福鑑の上に衣かづき。

仁王のやうなる大入道五日歸りの花嫁と。

しやならくと振りかけてサア腰元衆。早

うおじやと夕かけも。眼は朝日照る月の

シ都の方へと急ぎける。正成遙に見送つ

て。嫡子正行を招き涙を浮め。汝幼くとも

能く聞き置け。忝くも我帝に頼れ奉り。命

を敵の矢先にかけ身を戰場に抛つ事。譽を

取つて名を残さん爲にもあらず。子孫の榮

華を願ふにも非ず。朝敵を滅し國家安全

の。叡慮を休め奉らんと義を重んずるばか

りなり。今度の合戦味方必定打負け。王法

忽ち傾き御代を奪はれ給はん事。鏡に照ら

すが如くなれば。唯我一つの謀を以て様

々諫め申せども。坊門の宰相横しまの理を

すゝめ。君用ひさせ給はねば力なく打つ立

ちたり。父が一期の名残の軍花々しく戦ひ。

一戦に腹を切るべきぞお事は是より故郷に

歸り。父が最期と聞くならばいよく身を

全うして。廿にも餘る時金剛山を要害とし

て。住吉天王寺に打つて出で。近隣を劫し

討手向はば一命を。養由が矢先にかけ義を

紀信が忠烈に比べ攻め戦ひ。君を御代に立

て參らせ父が憤を散せん事。如何なる佛

事孝養も是にはなどか勝るべき。今生にて

汝が顔見る事も是迄ぞ。必ず詞を忘るゝな

と勇氣擔まぬ弓取も。恩愛父子の憂き世の

別れ涙をスエテはらくとぞ流しける。正

行聞きも敢ず口惜しき父の仰やな。楠正成

が嫡子正行こそ負軍を考へ。道より逃けて

歸りしと世の嘲りに落ちん事。屍の上の

恥辱候殊に親の討死と。思ひ定めし軍場を

見捨つる子や候べき。是非御供に連れられ

ずば我等一騎断抜け。敏達天皇の後胤。

井手の左大臣橘の諸兄公の末葉。河内の判

官が嫡子帶刀正行。生年十一歳と名乗つて

能き敵に断合せ。引つ組んで刺違へ其途の

道の先断と。思ひ詰めたる正行敵の旗を

も見ぬ先に。歸れとは恨めしや幼くて戰場

の。妨となるならば只今茲にて腹切らん。

介錯してたべ人々と芝の上にとどろて

シ聲も。惜まず泣きければ。在りあふ軍兵

感涙に。フシ鎧の袖をぞ絞りける。正成も共

に涙は先立てども。同わざと聲を荒らけ。

ヤア弓馬の家に生れて討死するが珍しき

か。お事を年月養育せしは。父が最期の供

せよとは育てぬぞや。戦ふべき所に進

み引くべき所に退き。天下に功を立つるこ

そ良き弓取とは名付けたれ。傳へ聞く西天

に獅子といふ獸あり。其の獅子子を生ん

で三日の内其の子を。數千丈の岩壁より真

逆様に投落す。獅子の機分なき子は。岩角

に身を破つて當座に死す。勢備る獅子の子

は中よりひらりと跳返り。身を全うすと傳

へたり。我が子の心を見る事は畜類とて

も斯の如し。今諸國八方に聳つたる敵の

中。幼き汝を返す事彼の岩壁に抛つ獅子の

子よりも猶危し。汝勇士の機分備らば。數

萬の敵の鋒先の岩石も。凌ぎて砕く獅子の

勢太平の御代と跳ね返せ。吉野初瀬の名木

も老木は次第に枯るれども。零るゝ種の色

香をつぎ花の名高き山ぞかし。二葉の苗を

残すこそ巖とならん楠が。長き世迄の

形見ぞと。鏝の引合より一卷を取出し。

是ぞ我が秘する所の軍術。此の書を讀みて

道を得ば。父正成が存らへあるも同然なら

んと。一卷を手に渡しサア。此の上にも

聞分なく。腹切らば切れ供せばせよ。父が

言ふ事は迄と馬引寄せゆらりと乗り。思ひ

切つたる心にもゆゝしき我が子の武者ぶり

を。見るも限りと目に脆き涙に手綱くりそ

へて。フッ駒を。ひかうるばかりなり。

行も理に當る親の教訓せん方も。涙をおさ

へ御詞一々承り候と。一卷取つて押頂き乳

人の恩地に馬引かせ。手綱かいくり打乗つ

て親子此の世の別れの詞。さらばとだにも

言はゞこそ欲を忘れ情を知り。義に逞しき

大將は百萬騎に圍まれても。恥辱の死はせ

ぬものぞ。此の理に背く武士は。勝も誠の

勝ならずスエテ。恥を子孫に残すなり。心得た

るか正行承り候と。互に駒を引返し東西に

別れしが。ふり返りく親は我が子の身の
行方。子は又親の最期の末思ひ包みて弓取
の。泣かぬを今の涙とは。餘所の袂にせき
かくる湊。川へぞ。寄せにける。明

くれば五月。廿五日尊氏の軍兵海山手
百萬餘騎。橋を鳴らし。旗を叩き。関をどつと

ぞ揚げたりける。楠手勢七百餘騎同時に
関を作り立て。多勢が中に割つて入り喚き

叫んで。戦ひける。味方は小勢と。
地ひながら一命を義路にかけ。名を末代

に止めんと思ひ切つたる勇士ども。北より
南へ追ひ靡け西より東へ割つて通り。息を

もつがせす攻めかくればさしもの大勢支へ
兼ね。須磨の上野へさつと引き。後陣の

勢をぞ待ちもたる。大森彦七盛長駒かけ据
ゑ大音あけ。鬼神ならぬ楠某が一軍に。

正成兄弟首取つて敵味方の目を覺さん。彦
七を手本にせよと廣言吐いて討つてか、

る。正成も駒駆寄せな到大森とや。合はぬ
敵不足ながら志の優しやと。まっしぐら

に驅出す此の勢に氣を失ひ。逃鞭打つて引
返すきたなし返せと追つかけしは。早瀬の
鮎を鷓の鳥の。追うて廻るが如くにて。

地程なく追詰め盛長が。上帯纏んでどうど
打付け首を掻かんとせし所へ。薬師寺十

郎同じく次郎左手右手よりむすど組む。し
やものくしと兩手を伸べ。草摺纏んで

捻合ふ間に大森小脇をそつと抜け。跡を
も見ずして逃失せけり。大事の敵を漏せ

しも汝等故と。兩脇にしつかと挟みゑいや
うんと締め付ければ。地口より血を流し

一人一所に伏したりける。是を見て吉良石
堂高上杉六千餘騎。楠を討留めんと八方よ

り喚いてかゝる。正成元より討死と思ひ定
めし晴軍。望む所と太刀さしかざし。討つ

て出づれば正季正員和田五郎宗徒の兵拔
連れく。死物狂ひの拜み討。當る者を幸ひ

に獲立てく。追廻す。されども敵
は。百萬餘騎入れ替へ。攻立つれば。

七十三騎に討ちなされ正成今は是迄と。一

村在家に走り入りこれ屈竟の最期場と。心靜かに鎧脱ぎ捨て如何に方々。抑最期の一念によつて善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なると問ひければ。

弟の正季からくと笑ひ。只七生迄同じ人間に生れ出で。朝敵尊氏を滅さんこと我等が願の一つなりと。言はせも果てず正成嫡しげに打領き。罪業深き惡念なれども我も斯様に思ふなり。いざや同じく生を替へ此の本懐を達せんと。言ひもあへず押肌ぬぎ氷の刃一文字。脊骨をかけて引廻せば。宗徒の一族十六人従ふ兵五十餘人。我も我もと刺し違へ同じ枕に伏したりし。惜しかりし惜しむべし日本無雙の名將の、フシ最期の程ぞ潔き。地間もすかさず大森彦七大勢引具し込入つて。一々に首掻き落し、目出たし心地よし。抜かぬ太刀の高名桶が首尊氏公に奉らば。三箇國は取れたるもの日頃心を透はせし。勾當の内侍も坊門宰相が計らひにて。今宵我が手に入る筈うまい事

の掴み取り。早う内侍の顔が見度いといふ所へ。女房一人先に立て長持を昇入れさせ。宰相殿のお使と聞くより彦七大きに悦び。

殿の一作。さりながらいとしい君の箱入氣の詰るもおいとしい。先づ御見と蓋を明くれば恥かしげに。薄衣深く首かくし。籬の梅の早咲の、フシ雪に埋れし風情なり。彦七猶も心浮かれ其のおほこながなほうまし。そさまを我が手に入れんため此の度の軍も。某が手を碎き御覽候へ桶一家を討留めたり。是より義貞が首途切らんは寢鳥を刺すよりいと易し。世になき新田に心中を立てんより。日の出の我等に離かれよ色こそ黒けれ心は伽羅。先づ我が陣屋同道して新枕の酒宴せん。いざさせ給へと肩にかげ三足三足は歩みしが。ア、ラ不思議や今迄軽き上藤の。俄に重き小夜衣我が妻ならぬ念力か。大磐石を肩先に疊みかけた如くにて。五體ちつとも働かずアヲ痴

者ごさんなれと。太刀に手をかけ振仰向けばコハ如何に。和田の新發意源秀くわと見開く眼の光。二面の鏡研ぎ立てて、フシ額に

着けたる如くなり。大森わな／＼顛ひ出し怖々下にそつと下し。逃入らんとする所をこれ／＼彦さん手が悪い。幾瀬の心を盡すとは偽りか何處へ往かんす。いとし可愛と言はんした言の葉は嘘かいな。ヲ、辛氣跡じさりさんすははや秋風かと。見上け見下す高入道。しやなら／＼の八文字は、仁王を搦がす如くなり。彦七五體縮めども弱味を見せじと大音上げ。ア源秀智仁勇を兼ねしといふ。桶さへ討取つたる盛長。言はれぬ腕立せんよりも腹を切れとぞ呼ばはりける。源秀今は堪られず長持の棒おつとりのべ。ヤイ禮儀知らずの國賊。桶一族國のため君のため死を善道に守つて。潔く切腹せしを何ぞや汝が。討留めしなどとはどの頬けたから吐出した。いざ来い源秀が手並を見せんと討つてか、

る。盛長猶も口へらず。侍たる身が坊主を相手にする物かと言ひ捨てて逃けて行く。

地ッヤア出家侍大釜生餘すまじと。ほつ立てく叩き立て八方微塵に打ち立つれば。

四邊に近付く者もなく皆ちりぐに逃けてけり。さもさうすくは是より河内に立越え

正成の最期を傳へ。重ねて義兵を擧ぐべしとかひなき首を取集め。怒れる眼にはらは

らと涙つらぬく玉鉢の。道は生田の森の露末の雫や末の世に響を。永く傳へける。

第二

地將の謀洩るゝ時は軍利なし。外内を窺ふ時は災制せずや。坊門宰相清忠が内通ゆる湊川の合戦破れ補正成討死すと雖

も。總大將新田左中將義貞。西の宮に御陣を召され士卒をなづけ給ひければ。馳せ集

つて味方の勢、フシ四萬餘騎とぞ聞えける。地侍所長濱六郎左衛門松明持たせ陣屋を

巡り。囚人四五人搦めさせ義貞の御前に引つ据る。彼奴ばら今夜近邊の田畑を荒

し。御馬の飼料に残せし青麥を。盗み刈取りしを搦め取つて候。見せしめの爲首切つて。獄門にかけ候はんと言上す。義貞聞召

し。抑今度の合戦は朝敵を滅し。民安全になすべしとの勅諭なれば。賣買耕作に妨け

ず。田畑の一粒をも刈取る者はきつと刑罰すべき由。諸軍勢に相觸れ所々に立てたる

高札を背きしは。敵方のあぶれ者か但し盜賊か白狀させよと御諭ある。地雜兵繩付引

つ立てサア大將の御前なるわ。眞直に申すべし。偽らば首搦切らんときめ付くる。

これこれ粗忽なされな我等も此の國の大將。ヤア大將とは。いやく巾着切の大將

の。又は傾國猿芝居人立多き所にて。人の懐腰の廻り手が觸ると此方の物。資金入らずの商賣此の軍始まつて。國中のよい衆は

草鞋がけで逃げ拵へ。遊山所は如何な事我等が如在びつしやりほん。御法度を背きし

はいつそてんほの皮巾着。お根付衆に咎め

られ、括られましたと申しける。地其の次なる大男。うぬが面付只者ならず。眞直に白狀せよ。のちばらばしやつ面をはつて

はつてはり廻さん。ア、餘りはるく御意なされな。はりが過ぎて此の態我等は博奕

の筒取。此の頃續く不仕合鍋釜疊釣お前。趣味嗜桶迄はたけ出しせん方盡きて二三日

麥をかるたの方に張り。ひねつてもく二寸より上目なく。擧句に今夜三寸繩に、縛

られましたと泣きにける。地三番目は若き出家三衣に似合はぬ麥盜人。仔細を申せ

と睨め付くる。されば愚僧は明石湯。蓮臺寺といふ淨土寺の後住に。無海と申す法師

なるが學問の憂き晴しに。ふと室の津へ出かけ梅花の移りを嗅ぎそめて。抹香の匂氣

詰りさ欠伸は百八煩惱菩提いつそおやまに宗旨を變へ好色修行と志し。通ひつめた其

の擧句がそれはいかい赤栴檀の。阿彌陀佛迄質屋へ飛ばし手暗目暗に調へ。今少しに

手づかへふつとした出來心。後悔先へた

き金只今斯様の責め念佛に達ふ事も。出家の身にはあぬまい事あぬまい。フシアアぬまいだど語りける。地遙かの後に年の頃廿餘りの女房。盗み取つたる青麥を背中に縛り付けられて。恥かしげにぞ泣居たる義貞つくぐ御覽じ。彼が體盗みすべき者とも見えず。仔細ぞあらん真直に申すべしとありければ。女ちつとも騒がす。ハア、仔細と申して麥を盗みしより外の仔細もなし。早々法に行ひ給へとフシ恐れもなげにぞ答へける。義貞猶も訝しく、仔細を言はずんば往還に曝らし諸人に恥を知らすべきぞと宜へば。地女はわつと計にて暫し涙に暮けるが。ア、是非もなや盗みするも夫の恥包まんと思ふ爲なるに諸人に面を曝さん事。恥を招くか情なや然らば包まず申すべし。妻が夫は足利尊氏の相傳の侍なるが。聊の事あつて主親の勸奮を受け。此の國の土民となり忍びて暮す憂き身にも。此の度の合戦これ屈竟の時節到來。御許しなくとも戰場に馳せ加り。分捕功名譽を願し。主の不興父御の勸當許されんと。思ひ定めし我が夫の心はやたけに逸れども。鎧一領あるにこそ手綱ゆりかけ乗つたりとも。一町も飛ばぬ野飼の瘦馬。住むもわびしき藁屋の窓より。閑の聲矢叫びの音微かに聞ゆるその時は。齒ぎしみし

の無念がり側で見ろさへ胸せかれ。己れやれ二世と交した大事の男此の儘にては果てさせじと。様々に思案し麥を盗んで兵糧の。便よくば陣所に忍び寝入りたる軍兵はら。太刀物の具思ふまゝに盗み取り我が夫に打着せ。自らも太刀脇袂夫婦諸共軍して。名を後代に揚ぐべしと思ひし事も徒に。地かゝる繩目にあふ事も夫の武運の拙さ故。仔細といふも此のあらまじとも存らへ果てぬ身ぞ。憂き物思ひさせんよりはやく殺して給はれなう。御慈悲なるわ人々とスエテ聲も惜まず。歎きしはフシ目もあて。られぬ風情なり。義貞も稍落涙あり。ア、あつばれ武士の妻にてありけるよ。命がけの盗みして。夫の武勇を勵ます心感じても猶餘りあり。罪を赦し義貞が。着捨の鎧太刀をも添へて取らすべし。地それくと宜へば御召替の錦の直垂。黄金作の一腰女が膝にぞ置かれける。サアくと歸つて物の具させ明日の合戦には。義貞が陣に向つて打つてかゝれ。敵ながらも見物せんはやくとくと宜ひて。縛の繩を解かせらる女はアット頭を下け。情ある御大將有難き御恩の程。何と報じ奉らんさり乍ら。我が夫は正しく尊氏公の御家人。すは合戦に及ばん時今賜つたる鎧を着し。太刀を持つて義貞公に向はるべきか。御用捨てしては尊氏公への不忠。是非なく一矢仕らば恩を知らぬ弓取と。末代迄の笑ひ草御恩は却つて仇となる。地只御慈悲には自らを盗みべんの科に落し。はやく殺して給れと。首差延べて泣き居たる。フシ心の内こそ清しけれ。義貞なほも感じ給ひテ、其の心を察し

てこそ。同感と最前より夫が假名實名をも

奪ねす。互に知られず知らぬ相手。名乗つ

て勝負を遂ぐる時いづれに用捨のあるべき

ぞ。さ程の事を汝に教へらるゝ義貞なら

ず。地入らざる詮議に時移れりはやく歸

れと太刀鎧。手づから取つて賜ひければ押

頂き脇挟み。お情は是迄明日の合戦には。

夫辯諸共心を合せ。恐れ乍ら御運によつて

御首を。賜る事も候べし御ゆるしあれ御免

あれと。御前を罷り立つか弓。引きは返さ

じ武士の妹背の。義理ぞ 三重頼もしきッ

シ己に其の夜も。地明け行けば勝に乗つた

る尊氏の軍勢雲霞の如く。湊川より討つて

かゝる義貞も西の宮より取つて返し。生田

の森を後に當て入亂れ攻戦ふ。太刀の鐔音

閑の聲。如何なる修羅の闘諍も。フシには

過ぎじと夥し。地小山田太郎高家は心ばかり

りは春の花。身は埋木の力なき野飼の馬の

繩手綱。ちぎれ具足もあらばこそ剩へ女房

の。昨夕に出でて歸らぬは心許なき氣遣

さ。足に任せて此處彼處在所を尋ね求塚

小松原より振返ればコハ如何に。遙か向ふ

の山々に中黒の旗二つ引兩。巴の旗も輪違

に東へ靡き。西へ靡き磯山風に翻翻して。

馬慥矢叫び天に響き地に充ちて。新田足利

の國争ひ。フシ今を限りと見えたりける。

ア、羨しき殿原が合戦や。せめて古具足の

一領もあれかし。取つて投げかけ何百萬騎

が中なりとも。只一揉に斬破り兩陣の目を

驚かせんものを。謂何をいうても浪人の紙

子頭巾に鋤一挺。思ふにかひのあらばこそ

貧は諸道の妨と世の謬も我が身の上。地

エ、無念口惜しやと。拳を握り牙を噛みス

エテ男泣にぞ泣き居たる。地かゝる所へ女房

は危き命を免れ。降つて湧いたる太刀鎧夫

に見せて悦ばせんと。足早に歸りしがヤア

こちの人此處にか。詞このなりは何ぞいの。

曠待兼ねてであらうと思ひ。いきせきして

戻つた。地これ私ちや女房ちやが。なぜに物

言はんせぬ氣合が悪いが高家殿と抱き起せ

ば涙を抑へ。詞ヲ、氣合もどうでようはな

い。ヤレ女房あの向ふの山々に。入違ふ旗

を見よ今ぞ合戦真最中。地あの軍中には主

君尊氏公父前司殿もおはすらん。正しき主

君老いたる父が天下別目の晴軍と。命を惜

まず戦ふを子の身として安閑と。見物して

日を送る是が無念にあるまいかと。言はせ

も果てすコレくく。詞其の泣き言はもう

入らぬ。これ見さんせと太刀鎧投出せば。

高家横手を丁ど打ち。鎧引寄せつくく。見

て。地矢留り金物押付板。發傳高經上巻附。

太刀は烏首兵庫鎮ム、是は大將の拂ひ物。

詞大抵では賣るまじきが但し損料でばし借

つたかと言へば。女房くつくくと噴出しア

アつがもない。日がな一日玉綿繰つて錢二

十取るや取らぬもの。八百年の手間賃でも

なかく買はるゝものかいの。馬の草も無

き故に昨夕義貞の領内の。青麥盗み刈りた

るを番の者に擲められ。殺さるゝ筈なるを

流石に義貞は哀れを知つた大將。夫の身の

上聞届け。命を助け其の上に此の太刀具
足。 地 サア早う出立つて手柄してござんせ
と。 綿嚙 取つて着せんとす高家突退け。 聞
ム、誠に義貞は五常を守る名將物のあはれ
を知る事。敵味方の隔てなき人と聞く。義
貞に貰うた鎧を着し。直に義貞に打つてか
からん事心よからぬ軍なれば。思ひ切つた
る功名もなるべからず。 地 エ、よしない情
を受けたりと。悔み顔にぞ見えにけるエ、
此方とも覺えぬ。義貞程の大將がさもし
返報受けうとて。何の情をかけられうそれ
故此方の名も問はず。用捨なく我を討てと
詞に念を入れ給ふ。義貞の目の前此の具足
着て働き。あはよくば義貞をしてやらうと
思ふ氣は無いか。エ、後れた人やと急ぎけ
ればム、分別した合點あり。 聞 一度着して
見せずんば。其方を騙などときみせられん
は男の恥。 地 サア小山田太郎高家が出陣と
鎧取つて投げかけ上帯高紐小躍りして。引
締めく太刀脇挟み立上れば。ヲ、あつば

れ武者振よい男私も馬に草飼うて。追付け
其處へと立歸れば。 聞 これ討死は軍の習
ひ。生きて歸れば仕合先づ今生の暇乞。 地
必ず泣くなコレ武士の妻になるからは。そ
こは合點死出の山路の一二の駆け。後れは
せまいと別れしは。はや修羅道の先陣と後
にぞ。思ひ 三思 知られける フ 傾く日影。
地 西の官大手の合戦入亂れ。人馬四方に馳
せ違ひ喚き叫ぶ其の聲は。山を崩すが如く
にて官軍既に戦破れ。堪へつべうは見えざ
りけり大將義貞唯一騎。返し合せく十六
度迄駆け散らし。御身をきつと見給へば。
數箇所の矢創馬鞍に立ちし矢は。枯野の薄
に異らず。エ、軍の勝負今日に限るべから
ずと。追來る敵を切拂ひく。求塚の小松
原 フ 心靜かに打ち給ふ。高家それぞと見
るより大音上げ。 聞 大將軍と見奉る正なう
後を見せ給ふ。引返して勝負あれと追つか
くれば振返り。 地 日本一の義貞に聲をかく
るは小ざかしと。 鎧 にかけてはつたと蹴散
らし。漂ふ所をひらりと飛下り。片手を伸
べて一突つけば木枯に。案山子の倒る、
如くにて横投にとうと伏す。 聞 義貞すかさ
ず駈走にのつかり。首を掻かんとし給ひ
しが鎧出立つくくと御覽じ。ム、ウ天晴
己れは痴者かな。義貞に易々と組敷かれん
力とは覺えず。何とて我を組敷かぬ定めて
仔細あるべき。さり乍ら汝が主の尊氏を組
伏せたらんは知らず。汝如きの侍を五十百
首取つても。さのみ義貞が手柄本望とも思
はず。 地 サア仔細を語つて名告れくと宣
へば。コハ御説とも覺えず。如何に大將な
ればとて。 應 と敵に組敷かるゝ者や候へき。
聞 足利尊氏の家の子小山田前司高春が一
子。小山田太郎高家 地 不足の敵と思召さ
ば。只首討つて棄てさせ給へとスエテ兩手を
緩めて働かず。 聞 いやく此の物の具は夜
前女に與へし。義貞が着捨の鎧扱は其の夫
よな。 地 恩を報ぜん志しをらしと優しさよ。
さり乍ら天下に比ぶる義貞が命。 聞 僅の鎧

一傾にて助からんとて取らせはせぬぞ。主

親の勸當につき望ある者と聞き。目を驚か

す功名して本望を達せよ。地 只今にても就

反し義貞と今一勝負。せばせよかしと宣へ

ども小山田は涙にくれ。地 重ねぬの御情

冥加の程も恐しく。申し上ぐる詞もなし。

地 言ふにかひなき此の高家がかせ首。義貞

公の御手にかゝり申す事。如何なる先陣先

駆にも勝つて身に過ぎたる譽。勸氣の父が

聞くならば。さぞ悦びフシ申すべし。此の

上の御芳志に。はや首討つて棄てさせ給へ

と。申し切つたる兩眼にフシ涙を流すぞ道

理なる。地 エ、義理ばつたる男子やと。地

取つて引立て塵打拂ひ。義貞に助けられし

と人に語るな我も人には語らぬぞと。手負

ひし馬を引立てて靜かに打つて過ぎ給ふ。

武將の氣質備つてフシ古今に語るも理なり。

小山田は茫然と。義貞の仁心に浸みて立

つたる所に。地 大森彦七盛長手の者五十騎

ばかり。どつと駆寄せ大音あけ。赤地の鎧

の直垂中黒の鎧は。敵の大將義貞遠目にも

見違へず。地 射取れやくと矢先を揃へ横

ぎる雨と射かくる矢先。さしつたりと小太

刀を抜いてはらりくと三重へ切落すフシ

されども鎧の。地 隙間々々矢すくめにすく

められ。今は是迄我義貞の命に代り。其の

隙に易々落し情の恩を報せんと。求塚に駆

上り。地 違からん者は音にも聞け近き者は

目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義

貞。十善天子に頼まれ參らせ屍を戰場の土

に埋む。地 功ある大將の最期の體よつく見

置いて手本にせよと。高紐切つて解く所を

大森主従下り重り。斬伏せくとフシ抑へて

首をぞかいたりける。地 直垂切つて押包み

官軍の總大將。地 新田義貞を伊豫の國の住

人。大森彦七盛長討取つたりと名乗りし

は。地 敵しうこそ聞えけれ此の聲に驚き。

馳せ散つたる味方の勢大將を討たせては。

一人も生きて詮なしと八方より引返す。地

義貞も取つて返しヤアくと同士討する狼狽

武者。誠の義貞これにありと斬つてかゝり

給へば。地 イヤ義貞が二人あるものか。新

銀古銀同じ通用これで堪忍仕ると。地 一散

に逃げて行く味方の大勢追つかくるを。大

將抑へて暫くくと彼は聞ゆる仮人。愚痴愚

蒙の狼狽者かゝる者の敵陣に。あるは味方

の利運ぞと諸卒を示す謀。智謀はるなが

ら天に入り波をも潜る尼が崎。山崎過ぎて

名將の譽は。雪井の桂川打越え。かけ越え。

渡り越え世に立越えて並なき。我が立つ袖

や都の富士西坂。本にぞ入り給ふ。

第三

地 周の武王は木主を作つて殷の世を傾け。

漢の高祖は義帝を尊んで秦國を滅す。され

ば尊氏將軍天理を恐れ。後伏見の院宣を申

し賜り朝敵の名を運れ。忠戦の鋒先鋭くし

て。兵庫湊川の合戦に打勝ち楠正成に腹

切らせ。新田義貞を駆散らし馬鞍休め物の

具も。脱ぎて紐とく花の都。東寺を假の館

城。フシ大將の。御所とぞ定めらる。地 猶も

殘黨洛中を犯す事もやと。口々の警固怠らず生き残る義貞一家。重ねて討手に向ふべし先づ〱軍の疲をはらし。樂みを諸人と共に樂む酒宴の興。此の度の合戦に。

分捕功名の帳面を開かせ。コハリそれ〱

に御褒美ある。仁木細川吉良石堂。南部桃

井高上杉武田赤松島山。澁川岩松一色荒川

小笠原此の人々をコハリ始として。外様の

大名小名御家人は言ふに及ばず。雜兵端武者に至る迄太刀刀馬鎧。金銀時服の御褒美

昨日今日の足輕も。知行の感狀賜つて首一

つが一筆に。千石になるもあり數にもあら

ぬ首取つて。御褒美を食れども僅か銀子三

枚甲。拾うて被せても。地明けき。名大將

の賞罰とオクリ仰がぬ。人こそフシなかりけ

れ。地爰に大森彦七盛長腹巻に直垂打ちか

け。揉烏帽子引立て血まぶれの甲箱御前に

差出し。敵の大將楠討死の後。總大將新

田義貞西の宮の軍破れ。味方の多勢に取巻

かれ求塚の上に斬上り。腹切らんと致せし

を。某矢すくめにして討伏せ首取つて候。残る軍兵落行く所を播磨路迄追ひかけ申せし故。御帳にも付け申さず只今實檢に供へ候と。蓋を取れば錦の直垂袖をちぎつて

包みしは。大將軍の首のしるし何候の諸

武士横手を打ち。さては義貞を討つたるか

今度の譽は盛長一人。弓矢の冥加に叶ひ

し侍。お手柄〱フシあやかり者とぞ羨ま

る。尊氏卿暫く思案し給ひ。錦の直垂

を着し新田左中將義貞と名乗りたるを。そ

れぞと知つて討つつらめそれに虚言もある

まじ。さり乍ら此の尊氏も義貞も。同じ清

和の後胤八幡殿の嫡孫。敵味方とはなつ

たれども共に一家の源氏の棟梁。殊に天皇

に頼まれ參らせ官軍の總大將。相隨ふ門葉

に大館大井田里見鳥山。大島堀口脇屋の歴

歴數を知らず。譜代重恩の武士も多かる

べし。義貞程の大將が討死せんに。我先に

とかけ合せ冥途の供として一人も討死せぬさへ不思議なるに。残る軍兵播磨路迄逃げた

るは心得がたし。一歳楠が煙首を以て欺き。義貞の智略に乗せられ京章の笑草。地にたくしき首どもをまさしけにもかけたりと。落書を立てられ六波羅の愚將ども

が。恥かきしと聞及ぶ。彼等は天性武略智

謀備へたる英雄。引くも駆くるも理に當り

生きるにも死ぬるにも。勝負の損得を守る

名將。如何なる謀をや構へつらん。卒爾

にもてはやし義貞にてなくんば味方の恥辱

は言ふに及ばず。汝不覺人の名を取るべ

し。方々如何思はる、フシ評定。あれとぞ

仰せける。大森つつと出でいや御評定迄

もなく。生捕の者に見せ御尋ね候はば。實

否早速知れ申すにて候とこさかしけに言上

す。尊氏大きに笑はせ給ひ。イヤ生捕に問

ふなどとは名も無き者の首の事。命を捨て

て働き入り生捕らるゝ程の者なれば。よつ

く大將義貞に忠信深き侍よ問はれて誠を言

ふべきか。若し御邊運盡き敵に生捕られ。味方の謀を問ふならば有の儘に言はんす

な。地覺束なしと宣へば。盛長は詞なく、
赤面したるばかりなり。地大將重ねて我
義貞と一家なれども使者の通路ばかりに
て。終に直に對面せず見知りたる人あら
ば。申されよと宣へば諸大名立寄りく。

關東以來此の度の合戦にも。遠目に見た
るばかりにて近付きし事なければ。地おほ
ろけの事は申されずと更に實否は極らず。
小山田前司高春末座より伸び出でて。見え
ば面ざし顔のかゝり若年の昔勘當せし。我
が子の小山田太郎高家に。似たりと見たる
親子の縁六十の老眼にも。紛ふ方なく胸に
浸みはつと驚きたりしが。地さあらぬ體
にて心を鎮め。新田殿の御貌は先年鷹狩の
折柄。一兩度も見參らせ大方に覺え候と。
地近々と立寄り右へ廻り左へ向き。ためつ
すがめつ見れば見る程。疑もなき我が子の
高家南無三寶。勘當して十八年此の世に存
らへ在るならば。此の度の合戦に大將の御
目に。及ぶ程の功名せよかし。それを品に

勘當赦し御前もとゝのへ老が世の。子孫の
榮えを見んものと。頼し心の綱も切れッ
ソッ。涙の零るゝを。地ハア、老眼の體
み定かならずと目を押拭ふ其の中にも當家
譜代の身をもつて敵の大將義貞と。名乗つ

て死せしは心得ず。申す詞に差當り。スエテ
前後にくれたるばかりなり。地大森彦七つ
つと出でこれく前司殿。生貌と死貌は相
好の變るもの。其の料簡して大概似たらば
似た通り申し上げられよ。凡そ道具の目利
でも。只一言で千貫の道具が偽物になる事
もあり。地粗忽言うて盛長が。功名を消す
まいぞと。ッ色を變へてぞ申しける。前司
重ねて御前に向ひ。面體よく似たるとは存
ずれども。某が心にて決定しても申され
ず。所詮一條大路の獄門にかけ。諸人の噂
をうかゞは。是非明白に顯れ。義貞に極ら
ば味方の勝利盛長が功名。地若しさもなき
首にて候はば六十に餘る前司めが。粗忽を
申して面目なしと獄門の木の下にて。腹か

き切つて伏すならば恥は某に止つて。盛長
が不覺もなく味方の恥辱も候まじ。此の實
否を糺す事某に任せ下さるべしと。望み申
せば尊氏聊然らば兎も角も計らふべし。さ
り乍ら都方は義貞最負の萬民。詞も直には
受け難からんと宣へば。地さん候壽永の昔
木曾殿北國合戦に。手塚の太郎光盛齊藤別
當實盛が首を取りしかども。名乗らねば名
も知らず見知る人もなかりしを。地樋口の
二郎が朋友の好しみに語りし詞の色。染め
たる墨の鬚髭を洗ひてそれとは存じて候。
友達の好しみにさへ心を明かすは人情の習
ひ。地殊に義貞は情ある大將好しみの者も
多かるべし。北の方は勾當の内侍と申す内
裏上臈。地斯くと傳へ聞き給はば忍ぶに餘る
涙の袖。諸人に紛れ給ひても思ひは外の色
に出で。其の隠れあるべきか。實盛が髭を
洗ひしはそれは篠原池の水。是は情の底意
なく誠を顯す涙の水に。地洗はせて御覽候
へと。申しもあへず首を持ちテ御前を立

ちけり 三

内侍狂女の段(十一行本)

一seitai へうたてやなこれ御覽ぜよ。今迄ゆるがす折つてかたけし此の柳。風の誘へばこそ一葉も散るなれ。たましく心すくなるを。戀こそ我を地くる。フシ狂はすれ。風狂じたる。秋の葉の。萩の音つれ今か。今かと田面の雁よ。君が玉章裏にかけて。我が手に渡せ渡せや渡せフシ八橋の。邊に匂ふ杜若花菖蒲。似たりや新田と聞けば懐しやなう。童どもは何故に立騒ぐぞ。なに新田左中將義貞といふ大將軍に打負け。敵に首を取られて獄門にかけ給ふとや。あら誠しからずや。中將といふ人は。元より弓馬は家の藝。雲の上人に交りては。歌連歌の道にも達し。鞠は曲鞠の品々迄暗からず。又酒盛などの折からは。水干の直垂取出し。衣紋美しう着んとて。地縁塗取つて打被ぎ。手拍子人

に嚇させ。扇おつ取り鳴るは瀧の水。絶えず蕩たり絶えず蕩たり。羽の嵐にオクリ地主の櫻はちりく。あさましや散るは櫻か降るは涙か誠にあれよ。あの獄門こそ涙の種。槍長刀劍の枝の險しき中の。梢に凋む花の顔ばせ。目も塞がり色變るとも契りは變らじ我こそ妻の勾當の内侍。楯になう内侍と召さるゝかや。いで参らう。めし夜の睦言も。人目忍ぶの袖打ちかざし迷ひ初めし夜睦言も。フシ語り盡さぬ鐘の聲。地雞籠の山に響きて森の小鳥八聲の鳥。曉の明星が。西へちろり東へちろり。ちろりくとする時は。扇押取り刀指いて往な。戻らうよと言うては妻戸に佇みし。戻らうよと言うては妻戸に佇みし。えにしなきりゝんな。君が心に秋風吹かば。往なうとも。戻らうとも何とも其方の御計ひと。抱付きて。せぬ仲を葛の葉の。恨は風の科もないも。誰が手にかけて宇津の山。萬亂れそめ。狂ひ出でたる。宵は待兼ね夜中は歎き。稚兒のやうな傾城が。涙起きて空見れば。目目の肴には。白瓜唐瓜から梨子から梅王母が。持つたる柳を劍と定め曠志の焔は焦るゝ紅葉。矢の烈しき嵐になれて。櫻の四方へばつと。引く手も武士の。か。涙の。袖も黒髪も亂れ。心ぞあはれなる。警固の下部棒振廻し騒がしき氣違ひめ。

其處立退けと追拂ふ前司仰へて。さなせ
そくいふ事ありと立寄りて。扱は義貞の
北の方にてましますな。如何に狂氣し給ふ
とも年月馴染の夫婦の仲。顔容も忘れ給ひ
しか心を鎮めてよく見給へ。義貞にては候
まじ歎を止め歸り給へ。地正體なやと諫む
れば。うたての人の言ひごとや。伊勢の濱
萩難波の蘆。所に變るは草の名よ。異國は
知らず本朝に名も一人身も一人。又と二人
は無き人なるをさもなき首を何故に。墨く
ろくくと高札に。新田義貞と記したる其
方こそ狂人よ。我は元より氣違ひのこほ
さぬ水のあはれを知らば。さのみ人目に曝
さすともあの首を妾にたべ。煙となして亡
き跡の。菩提を弔ひたう候ふとエテ袖に縋
りて歎かる。御歎きといひ御不容
はさる事なれども。此の首は盛長が討ち
討つて候へども義貞とは見え難く。外に似
たる者のある故曝して賞否を糺さんため。
地斯くの通りといふ所に東の辻に人立し

て。是も女の物狂ひ眉かき暗り黒髪も。お
どろにばつと振りかたけたる笹の葉の。亂
れ心や、フシ狂ふらん。地あら憚りや恐れを
知らぬ京童。地忝くも我が殿御は。源氏
の大將左中將義貞。参内の道そこのけとこ
そ。歌なつかしや我が夫の。雲井を出でし
は卯月の空。秋より先に、フシ必ずと夕の。
数は重れど。地來ぬ夜積りの恨めしや。獄
門にたが更級の月日待ちしも徒事。後世
弔ひ自らも死出三途を伴はん。御首たべな
う警固の人。お情あれ人々と獄門の木に抱
き付き、フシ人目も。分かず泣き給ふ。地以
前の狂女走り寄りこれ。地義貞殿の妻とい
ふ御身はそも何人ぞ。地ヲ、聞きも及び給
ふらん勾當の内侍とは自らよ。地イヤ眞の
勾當の内侍とは妾が事。御身は定めて思ひ
者か一夜妻。假の情を忘れ兼ね跡迄慕ふは
優しけれども。地菩提を弔ふは本妻の役お
首は我に下されと。地押退くれば押退けて。
地さいふ御身が一夜妻か遊女か。筋なき事
な申されそ勾當の内侍とは。大内の女官御
代にたつた一人の女。地義貞殿の本妻我な
らで誰あらん。物に狂ふも夫のゑ。本性は違
はぬぞ。地サア眞の内侍ならば。義貞殿の
参内の出立有様覚えしか。忘れしか。地よ
もや知らじと宣へばなう忘れんとすれど忘
られぬ。其の出立は紫裾濃。柵櫃の板冠の
板。金銀にて中黒のしるしを打つて金札。
大立鞆の懸當黄金作の太刀刀。赤地の錦の
御着長妾が取つて着せければ。揺つて上帯
ちやうど締めにつこと笑うて。地天晴我な
がらも弓取かな。今日の軍に譽を得て名を
末代に止めんと。地馬引寄せてゆらりと乗
つたるはなう。大將軍にまがひなし近づく
敵の鬨の聲。味方に轟く攻鼓筆の木枯磯打
つ波。寄せ來る勢をまくり切り。大敵を
見て勇む事。荒鷹が雉を見て鳥屋を。潜る
に異ならず。雨や霰と飛來る矢先。上る矢
には掻い潜り下る矢には飛上り。向うて來
る矢は小太刀を以て。切つては落し受けて

は拂ひ、はらり／＼と切拂ひ須彌しゆみの四方の
四天王。魔醜ましゆう修羅しゆらが放つ矢を一度に切つて
大海に。拂ひ落すが如くにて、フシ面おとを向く
る敵もなし。聞かゝるゆゑしき武士ぶしの運盡
き弓も矢も折れて。修羅の奴やつと成り給ふ

後世弔ふ者は我ばかりと。獄門ごくもんに取付けば
イヤ／＼／＼。聞それは軍の出立いでたち。大内の
事を知らぬ身が。地内侍ぢないしとは偽りと引退け
てはわつと泣き。押退けてはわつと泣き籬せき
の菊の狂ひ咲き。花を争ふ蝶鳥の、フシ露に
しをるゝごとくなり。地前司ぢぜんし聲をかけエ、
はしたなし先づ暫くと。二人を左右へ押分
け。首は一つ内侍は二人。是非一人は偽
りなり。これ後に来た上藤義貞と札は打つ
たれども疑はしき事あり。心を鎮めて能く
御覽ごらんせと。地獄門ぢごくもんを取下し見するもあへな
き生首なまがしらを。なまめく膝にかき載せて一目見
てさへ馴れし夜の。而影だにもまがはぬも
の能く／＼見れば園原や。ありとも知らぬ
死顔しげんにぞつと怖さこはのア、恐しと。拂ひのけ

て身を顛たふはし。いや／＼是は人たがひ。目
許口元義貞殿には似ても付かず。地豫ぢよて我
が夫宣つとひしは。軍は時の遅いつ討死も測はから
れず。敵に向ふ度毎に帝より賜りし。蘭奢らんせ
待の名香内甲なまがしらに炷たききしめん。鬢かみの髪に名香

薫る首取りたりといふ人あらば。聞義貞が
討死と思へとの御詞。地軍の騒さわぎにあさま
しい下郎の首と取違へ。誠のお首は勿體な
や藁わらに埋れしか。尋ねてたべ人々と歎なげき給
へば以前の狂女泣出し。地エ、口惜しや如何
に見知りなきとても。下郎の首とは餘りぞ
や我が夫ちとは身貧にて。名香は炷かねども弓
取の心の花は。梅櫻よりかんばんしく仁義に
命を捨てしもの。屍しかばねに恥を與へたるか情な
やいとほしやと。首抱だき寄せて伏轉ふたび、フシ
聲も。惜まず泣きさるたり。地前司ぢぜんし飛とひか、
り取つて突退つとげ。首の鬢かみを掴つかんで涙をはら
／＼と流し。聞六十の老眼に見しも違ちがはず。
我が子の小山田太郎高家にてありけるよ。
お事は連添れんぞんふ女房な。我こそ彼が父。足利

尊氏卿には譜代相傳の御家人。小山田前司
高春生年六十七歳。地命長ければ恥多しと
は我が身の上みづかみに知られたり。十八年以前彼
奴やつは其の時十二歳。猪狩じゆかりの御供せしに。年
ふる猪じゆの峯越かみすを誰かある。聞あの猪射止
めよとの御説。太郎ござかしけに小弓に矢

をはけ向ひしを。尊氏はつたと腕うでませ給
ひ。小腕こでにて仕損しせん罷りしされと宣ひ
し。御詞も終らぬに弓と矢大地へ投付けし
を。いよく立腹たてはらまし／＼誰に當つて抛
ち。年にも足らで慮外者親前司はなきか。
あれ引立てよと御怒り。それより君の御不
興なれば親も則ち勘當かんだんして。地十八年の春
秋は風の便りも、フシ絶え果てし。首も性しやうあ
らばよつく聞け。世間の親の勘當は遊女博
奕あそび大酒の沙汰。それさへ親は子を思ふ子心
にも弓矢の道。主君に向つて意地を立てた
る御憎しみ親の身では憎い半分。嬉しいが
又半分の勘當ぞや。聞今度の軍に義貞方ぎてんかたの
名ある兵へい。首取つて來れかし君の御前は言

ふに及ばず。天下の武士に褒めさせ。我も世上の親たる者に羨まれん。今や来る／＼と毎日の高名帳。夜はくつて明日を待つ親に孝なく義も知らず。所領恩賞に恥をかへ敵に手を下げ膝をつき。義貞に降参し知行に命を捨てしよな。とても捨つる命をなぜ尊氏に奉り。名の爲には捨てざりしぞ親は年寄る子は犬死。小山田の苗字の譽誰が未の世に残すべき。エ、あさましやと齒がみをなし。持つたる首をかつばと投げステとうど坐して。泣きけるが。思へば汝は義貞の郎等。我は尊氏の御家人親子ながらも敵味方。首なりとも一太刀と振上げて打ちかくる。女房縄つてなう悲しや。内侍様も止めてたび給へ。親の勸當受けし身は未來も闇に迷ふと聞く。勸當御免なき上に親の手づから子の首に。刃を當て給はゞ迷ひの上の迷ひなり最期の様を聞分けて。許しのお言葉かけ給はゞ名僧知識の引導もそれにはなどか勝らんと。口説き立てく／＼歎け

ば。さすが親心。言ふ事あらばはや語れとフシ咽び。入りたるばかりなり。女房猶も涙にくれいたはしや我が夫の。今度の軍は高家が主親の勸氣を赦され。昔に返るは此の時と軍兵に交り。幾度か出で給へども浪人の貧しき身。鎧一領あらばこそ素裸武者の鎗刀。拾ひ弓に拾ひ矢島に使ふ野飼の馬。打てどもあふれども飼はねば瘦せて脚立たず。いかなる猛き武士の三條小鍛冶が劔にも。なう貧苦の敵はフシ防がれず。腹を切らんとし給ふを妾様々力を付け。兵糧秣の志盗み刈りし青麥の。畠は敵の領内高小手手に縛られ。大將の前に引出し罪に沈む筈なりしに。敵ながら義貞は情ある大將。身の上を聞届け命助かる其の上に。召替の錦の鎧太刀刀迄賜り。此の恩ありとて必ず我を庇ふな。それ故夫が名は問はぬと。仁義深き御詞語り聞かせし我が夫の。心魂に浸みたるか御命に代り。我源の義貞と名乗つて敢なく討れ給ふ。縦へ千金萬金

を延べたる鎧太刀にもせよ。高家程の侍が敵に臨んで死すればとて。鎧一領太刀一振に目がくれてそもや命が捨てられうか。是ぞ誠の情の死とは夫の事。恩を忘れ義貞を討ち参らせ。尊氏公より大國を賜つて榮華を極むる果報より。義理と情に命を捨て獄門にかゝるこそ武士たる者の果報なれおいとしや御最期迄。心にかゝるは父御の不興。御免あるとの一言の息をお顔に吹きかけて。親子の縁を二世迄も。結んで進せてたび給へと。縋り掻き寄せ抱き寄せフシ消え入り。泣きければ。内侍も扱は我が夫の命の親ぞと諸共に。ステ聲を揃へて啣ち泣き。誓固の匹夫下部迄。袖を絞らぬ者はなし。地父の前司も愁歎の涙にかきくれるたりしが。エ、あつばれ我が子や出来したり。たゞ残り多きは十二歳より一日安堵の思ひもなく。貧苦で死なせし可愛さよ。情にもせよ義理にもせよ。義貞を勤けし子の親は。主君尊氏へは不忠の者。

奉公すべき理窟なし御前にて此の首が。義貞にてなき時は獄門の木の下にて。腹切つて伏すべきと發言放つて申せしは斯様のため。尊氏の御手にかゝると思ひ我が首手づから掻き落し。勘當は異途にて直に逢うて赦すべし。内侍様をかしづき情の恩を報ぜよや。三世の諸佛大悲の力親子一所に導き給へ。是迄なりと刀を首に兩手をかけ。ゑいゑいゝの聲の中二人ははつと縋れどもはや其のかひもあらしの庭の。老木に積る白雪のフシ脆く落ちてぞ消えにける。會者定離とは言ひながら逢ふも今別れも今。これ目前の愛別離苦うきを重ぬる涙の袖に。鬘の首を押し包む内侍は夫の命の親。是も我が爲願ぞと身に引添へて諸共に。誠ありける現世の道仁といひ義と名付け。忠孝深き法の海共に弘誓の舟岡山。煙の末も一筋に亂れぬ。御代の教なる。

第四

取よさ様の。寢姿窓から。見れば。花なら

ば初櫻。月ならば十三夜。盛まだしき。閑の内さては。野に咲く百合の。花しよが。地少くわんフシくとぞ謠ひける。や1く噓しい丸太め等。暮に及んで何事ぢや番所が目に見えぬか。地うぬ等が来る所でない。通れくと吐つても睨んでも野に咲く百合の。花しよんがゑ。此所を知らぬか。坊門の宰相様の御下屋敷。尊氏將軍と御内通。後醍醐の天皇を此所に押籠め。近日隠岐の國へ流し者。の目も寢ずの大事の番。宰相様も只今奥に御入り。追付けお歸りそこ退いて居れくときめつくる。ア、固堅い侍ぢや。地是より殿しい番所波に揺らるゝかゝり舟の中迄も。小唄は附けたり假寝の伽に呼ばんす。寢しめての寢心は髪のあるより無い方が。びらくせいでよいけな。番衆は猶用心すはといふ時早鐘まさり。私が頭を打たんすりやフシはやくわんくとぞじやれかくる。地奥より殿のお歸りと。呼ばれば番の者

ばらくと畏る。宰相様々立ち出で四邊を見廻し。あの裏の方は塀一重。犬の潜つた道もある。如何にしても無用心。地明くる早々周圍に蜘蛛手を結はずべしいよいよ番を怠るな夜半替に定めしからは。氣の詰る間もなし番所は禁酒にして。萬に氣を付け油断すな追付け尊氏より大國を賜り。此の宰相も公家を止め武家の大名となる時は。皆相應の知行取らすべし奉公に精出せ。又後程見舞はんとフシ上屋敷へぞ歸りける。地番の者ども伸をしてやれ氣詰りやこれお比ん。且那が往なれたもう樂ぢや。地話ほうと踊らうと夜半迄はこつちのもの。爰へくと招かれて。ム、ウ殿達は三人私がおてきはどれぢやゑ。氣が定まらぬと言ひければハテ誰あらう此の鼻。ヤア傳五平それはまんがち。今宵は身がとめぶろだ。イヤ地身が先だとせり合へば。これく傳五軍太競合は無用。此の源藏に任せて置け。寢る時はもみ蘭でしづいて来い。地先づそ

れ迄は一盃あけてしよけるべい。ヤ酒賣の
又六がもう来る時分と。比丘尼一人に侍三
人役目の番は餘所の町聲高々と荷ひ賣。
大名深草大納言唐人分別ぬらりころりの兼
平。やい大名とは白餅深草とは薄餅。大納
言は小豆餅唐人玉蜀黍分別餠餅。ぬらりこ
ろりは鱧の蒲燒山椒味噌。ウタヒ兼平とは木
曾殿の御内に今井鮎。酒盛にかくれなき一
騎當千の御肴磯打つ浪のまくり飲み。蜘蛛
手かくなは十文ぎりの。茶碗に一杯酒でも
餅でも甘い物の地勢揃ひ。フシ錢次第とぞ
賣りにける。地各悦び又六來たかは見よ。
かうした色遊び酒も鮎もありたけはたけ買
うてやる。汝も飲んで太鼓もて。ア、それ
は忝い商して酒飲んで。其の内で利を取
るは目出たい西が吹いて來て丸太舟の湊
入。三人の御番此方は加番に青のほん様。
かるたには太この二盃には太この一。私か
らと引受けてついとほし。サア丸太様へと
差しければ各口を揃へ。其の盃を三人の

中氣に入つた男に差し給へ。其の者が枕並
べる。地蘭取よりは是がまし。思ひ差になさ
れと面々衣紋絞ひフシ髪かき。撫で、並び
ける。地いやくそれで氣が知れぬ。茶
碗三つで面々盃私を思ふ數程飲んで。心
中を見せさんせ茶碗の數の重るが。私が今
宵の男ぢや。ヤア面白い酒の賣れる端相と。
茶碗並べて三升樽すぐにお酌と立ちけれ
ば。何れも合點まつかせと切手一盃はつい
く飲み。二盃目ははや我飲みにて。三盃
からが義理一遍。後には義理も瓢箪も。ふ
らりくが忽ちに。ころりくといきつき
てフシ前後も知らず臥しにけり。地これこ
れ寝入らぬ先に錢しませう。地これ旦那
はて手の悪い地狸寝入り。酒代早うと揺り
起すマアよいわいの。たつた今寝入りばな
今宵は歸つて明日でも取つたがよいわい
のと。言へば又六腹を立て。ム、地扱は同
類ぢやの。其方から錢せうと。地ねだれか
かる其の間に塀の破れに月影の。白犬一疋

尾を振つて箱の鮎を狙ひ付く。咬へる所を
又六どつこいと首玉押へ。地犬も人も此の
屋敷は喰ひ逃げの大寄。地罷り成らぬと腕
ぎ放すこれく。地いうても畜生執心が可
愛い。地其の値は私がやる中で一番大きな
を。お腹の飯取つて魚ばかり賣つてたも。
地是は犬殿大盡がついた何も商賣。丹後鮎
の一番卅八文合點か。地合點々々竹の皮一
枚たもと木蔭に立寄り。懐中より一通の文
ぐるく巻き魚中に入れてこいぐく
と。投出せば引つ咬へフシ塀の破れに入り
にける。又六とつくと見すまし小聲になつ
て。地これ比丘尼殿其方は異國の范蠡をや
らるゝの。此の所は坊門の宰相下屋敷。天
皇様を押籠め置く。定めし其方は新田殿よ
りの案内と見た違ふまい。某は出雲の國名
和又太郎長年といふ者。御厚恩の繪旨を受
け近寄るべき便。斯様の商人せめて一人方
人のあれかし。奪ひ出し奉らんと心を碎く
所なり。地御身の上ありやうに聞かまほし

と言ひければ。ヲ、我等は小山田太郎高家と申す者の妻。新田殿の情を受け夫高家は討死し。自らは尼となり勾當の内侍様と一つ住居の其の中にも。天皇様を奪ひ新田殿の御本意をと。思へども女業せめての便に御力を。付け移らするばかりなりと語れば長年大きに悦び。是ぞ御運の開くる時折しも番の者は喰ひ酔ふ。此の塀一重踏破り易々奪ひ奪り。吉野の奥に皇居をすゑ。根來法師熊野武者を語らひ。吉野十八郷を都と定むるものならば。北國西國靡く事案の内ぞと餡餅の。荷ひ棒にて塀一間どうくどいと突き崩し。つつと入れば犬の聲々一犬吠ゆれば萬犬に。番の者ども目を覺まし起上れどもひよろく。よろりくとよろめきながら南無三塀を破つた。又六めか丸太めか。一討にしてくれんと。拔連れく入りけるは。フシ危かりける次第なり。

地既に夜半の番替り引連れて宰相檢見の爲に來りしが。イヤアウ番の者は一人もなく。塀押破りしは心得ず。敵の忍びの入りけるぞ込入つて討取れと。喚いて入らんとする所に又太郎大肌脱ぎ。棒提げつつと出で。我等は酒賣の又六と申す者。誰とも知らず十人ばかり我等が酒館飲み喰ひ。番衆にも振舞うてまんまと抱込み。錢も拂はず塀を破つて入り候。我等が爲には喰逃の敵。奥に氣遣なざる。な是へ追出し申すべし。酒臭い者を合圖に討取り給へと言ひければ。ヲ、出かしたく急いで是へ追出せ。承るとつつと入り無二無三に追立つる。三人の酔ざめども逃出づればそりや討取れと取廻す。イヤ我等は御内の傳五平。傳五平でも酒臭いはしれ者なりとはたと斬る。我等も御家來源藏。やれく彼奴も酒臭い。拙者は軍太こいつは取分け酒臭い。一人も遁すなとフシ片端切つて捨てにけり。又太郎飛んで出でお手柄お手柄裏門は大方仕舞。表門の酒臭さ鼻がもけていにまする。皆々表へお廻りヲ、心得

た。隨分鼻を利かせよとフシ表門へと駈出す。其の際に高家が女房天皇の御手を引き。走り出づれば數多の犬跡先を取巻いて。吠えかゝれば又太郎打漏されの今井の四郎。手なみを見よと館も餅も投出し。虎の尾を踏み毒蛇の口。犬の背中を躍り越え大和路さしてぞ。天皇徒歩路の御幸

タセ世は末世に及ぶととも。日月は地に落ちぬ。ならひとこそ思ひしに。我等如何なれば。王位を出でてかくばかり。人臣にだに交らで。雲井の空をも迷ひ來て。行方いづくとフシ白路は。草葉の上に置きもせて。袂に寒き秋の霜菊月も末つかた。故宮を忍び出で給ひ。あやしの賤の神詣に。フシオッリやつせど。馴れぬ。蒼の笠。ハルフシ雨を舍める。狐村の樹。夕べを送る遠寺の鐘。哀れを催す時しもあれ御いたはし先帝は。ステテ梁園の昔の御遊。華軒香車の外

を

巾オクリ千歳ちとせの。坂と詠よせしも。フシ耳には
觸ふれて手にふれぬ。憂うれきふし繁しげき竹の杖。
長年一人御供みまひにてオクリ知らぬ。野山を此處
彼處。辿たどらせ給たまふ御有みまひ様。フシ餘所の。見る
めも恐れあり。地ちこゝは何處いづと里人に。い
ざ鳥羽はなは嘍せ秋の山。岩に碎くだくる瀧川たきがわのどう。
どうくどと寄せ來る追手の聲かそれ
か。あらぬかいや。フシ待まちてしばし。あれは
野もせに誰たれ招まく案山あま子の陰かげに落人おちの。鳥よ
り先に驚おどきて。フシ共にむら立つ鷺さぎの森。急
ぐとすれど。玉鉾たまぼこの。習なはぬ道の峻たけしきに
御足みそとも缺かけ損やじ。御草鞋みぞうりに流るゝ血ちは草葉
に染ぬめていさら川。フシ紅葉もみぢしがらむ如く
なり。地ちあはれけに昨日きのう迄。玉樓たまろう金殿かねでんの床
に坐まし。長月ながつきに戯あそべれ色香いろかに染ぬみ花はなやなか
りし玉體たまがみの今日は生駒なまがまの苦く延のび。片敷かたぢ袖そでに
御涙みなみ。スエテせきあへさせ給たまはねば。さしも
に猛たけき長年ながとしも。涙なみだは胸むねに關か戸かどの院いん。こゝは
名高なだかき山崎やまざきの。麓ふもとに亂みだす萩秋はぎあき薄うす。オクリ踏ふみ
分け。泣なくや狐川きつがわ東あづまの空そらを眺ながむれば。あれ

く。宇治うぢの川霧かぎりたえく。の。瀬せ々の淺瀬せんせに
童わらわの小手こたゑさしつるゝ聲こゑ々に引ひ。歌うた故郷こきやう戀こし
や。わがふる。さとの。柴しばの庵いほも。なつ
か。しや。いほりもしばの。柴しばの庵いほもな
つ。かしや。戀こしゆかしとフシ聞きくからに。
けに九重こゝろも遙々はるかと跡あとに名残なごりの男山おとやま。榮さかゆく
事もありこしに今の憂うれき目を。三津みやの浦うら。
西にしに霞かすみみて。淡路たんろ濁にご。フシ須磨すまの關守せきしゅ。呼よ
びおこし通とほふ千鳥ちどりのちりくく。寄せ
來るく。波なみも寄せ來る面舵おもて取と舵か拍子ひら揃そろへ
てさ。舟歌ふねうた面白おもしろや。くさつさ。堺さかいの浦うら遠とほく。
帆かほを十分に。地ちあけた處ところが。面白おもしろいよの。
何なにに驚おどへん五手ごて船ふね。フシ沙風さかぜ寒さむく吹ふき通とほふ。
笠かさも袂たもともひらくく。ひらの若江わかしも過ぎ
行いけば。日影ひかげもさがる藤井ふじい寺てら。はや告つげ渡わた
る鐘かねの聲こゑ。剛山ごうざんもフシはるかなる。地ちワキ
あれ御覽みまひ候まうへ霞かすみみて見みゆる高嶺たかねこそ。志し貴き
の毘沙門びさもんにて渡わたらせ給たまへと奏聞そうもんすれば。シ
テ主上しゅじやう御手ごてを合せ禮拜らいはいあり。佛法ぶつぽふ擁護ようごの本
地の月垂つきた逆さか和光わくわうの影清かげきよく。再び朝廷てうてい明あかに

四海しがいを照てさせ給たまへやと。丹誠たんじやう無な二にの御祈ごいのりり
神かみ慮りょも暗くらに量はかられて。フシたゝ頼たのめ。年としふ
る松まつの。ことぶきを御代ごだいにゆづりて高安たかやす
や。それにはあらで是も亦また沖津おきつ白波しらかみ立田たち越こ
夜半よるにや君きみが一時雨いちとき。雲行くもく空そらを木蔭きかげかと
濡ぬれて。佇たたみ。三さん重じゆう給たまひけり
フシ取傳とくでんへたる。梓すず弓ゆみ光陰ひかりかげ矢やの如ごとく楠正成くすねまさなり
が百箇日ひゃくかんにち。立つや其そのの名なも忘れ形見かたみの一ひと千
帶おび刀やいば十一歳じゅういちさい。父ちちが最期さいごの無念むねんさの胸むねに止とどり
骨ほねに徹とおみ。幼心こころに只ただ一騎いちき弔うらひ軍いくさ思おもひ立たち。
鍔つばの袖そでに小櫻こざくらの花はなを手向てむかひの法のりの駒こま。曉あけ深ふか
き星ほしの影かげ共に耀きらく銀覆輪ぎんぷくりん。ホハリ鞍くらの山形やまがた
山道やまみちの小石こいし雜まりの小笹原こささはら。そよ吹ふく風かぜにく
りかけて取とつたる手綱てづな濃紫のうむらさき。藤井ふじい寺てらを弓手ゆみ
になし馬手うまてへさらくしとく。かつ
しくと歩あませて神かみの昔むかしも念力ねんりきの。示現しげんは
今いまも。地ちあら人神ひとかみフシ天神てんかみの。森もりにぞ着きき
にける。地ちあら不思議ふしぎや後あとの方に女おんなの聲こゑ。
圓ままでよくと呼よびかけた。地ち何者なにものなら
んと振返かえれば衣え引きからけ腰刀こしやいば。長刀ながやいばかい

込み追ひかくるは母上なり南無三寶。我を止めんためなりと一鞭くれて駈けさする。息をばかりに走り付き鞍の鞆をむすず取る。とめても引いても駈馬の二三十間引措られ。やれ物が憑いたか帯刀母にも知らせず何處へ行くぞ正行。母は息切れ死ぬるをも構はぬか。馬を留めぬかゆめと。叫び給へば正行馬より飛んで下り。■土に手をつき頭を下け。父の忌の明き候へば弔ひ軍仕り。尊氏と打果さんと思ひ立ち候。■御暇申さぬ段眞平御免下されとスエテ差俯向いてぞ居たりける。■母はとかうも涙にくれ。エ、いかに幼ければとて。十に餘れば大人役などさほどにも辨へなき。■榊檀は二葉より香しといふ譬もあり。正成の子ならずや日本半分切取つたる尊氏に。お事一騎驅向ひ一太刀合する迄もなく。多勢が中に取巻かれ當座に討たればまだしもよ。生捕となつて面縛せられ恥辱の上に命を失ひ。い

つ世にか天皇様を御世に立て。父亡魂の本意をば遠ぐるぞや。■親の敵討たんとて。輕々しく身を捨つるは端侍の上の事。■父御前の櫻井より汝を歸し給ひし時。生先迄の教訓を母にも語り聞せしが。百日経つや經たすにて其の諫を忘れしか。一族語らひ軍兵揃へ。菊水の旗眞先に押立て。古今無雙の名將と呼ばれたる足利尊氏に。一あぐみあぐみせんとは思はずして。■一騎武者の勳に如何なる手柄をしたればとて。其の名を揚ぐるばかりにて。天下の爲には益もなし。■幼くとも楠正成が子六十餘州を重荷に持ち。大事の身とは思はぬか恨めしや情なや。サア歸ればや歸れ。重ねてからは口では言はぬ抓めくするぞ覺えてるや。是についても正成殿。今三年世に存らへお事が十四五にならば。かく憂き世話もせまいもの果敢な浮世やあさましやと。諫め口説きて泣き給へばさしもに勇む正行も。母の歎きに亡き父の顔を今見る心地して。母の膝に抱き付き、聲も。惜ま

す泣きたる親子の。歎きぞ哀れなる。■かかる所に又太郎長年天皇を眞ひ奉らせ。森を目にかけ來りしがヤア心得ぬ。■夜はまだ深きに幼き身に。物の具かため女も長刀横へしは。ム、ウ例の山賊よな。幸ひ幸ひ彼奴を感して。夜道の案内させんと思ひ。こりや／＼山賊。熊野詣の同道に病人あつて迷惑なり。夜明迄看病すべき所やある。送つてくれればきつと禮をせんと言へば。母聞きもあへすいや／＼我等は山賊にてはなし。熊野道者の御病人とは殊勝にもおいともし。我が宿所は三里ばかり。■折節是に馬もあり。召されて御入り候へかし。■いや志は嬉しいが人を忍ぶ我々。其の中に夜明けては氣の毒。■三里行けば隠れもなき楠に縁ある故。方々を頼む迄もなしと行き過ぐればこれ申し。■楠に縁ありと宜ふは誰方ぞ。是こそ正成が妻や子にて候へ。■扱はさうか我こそ隠岐の國。名和又太郎長年と申す者。眞ひ奉りしは忝くも後醍醐

の天皇と。いふより母子ははつとばかりし
さつて額を地につくれば。君も泥土に下り
させ給ひ汝は帶刀正行汝は母。いづれも正
成が形見かや。妻子を御覽あるにつけ父が
忠節をこそ思召し出せとて。正行が髪かき
撫でて。龍眼に御涙をスエテ。浮め給ふぞ有難
き。四角坊門の宰相反忠にて君俘となり
給ふを。小山田が妻と心を合せ奪ひ奉りし
有様詳しく語り。尊氏方の追手の軍兵千騎
ばかりあれ。地あの松明事急なり先づ御邊
の館迄。急ぎ御幸なし申さんと言ひけれ
ば。正行かぶりを振つていや。我等が
館へ君を入れ奉り。追手の勢を引受け狭間
も切らぬ堀一重。溝同然の埋れ堀一日も堪
へず攻落され。敵に分量を見さがされ後日
の合戦成り難し。此の所につつ支へ追手の
大勢打散らし。出合頭の初軍に敵に一しほ
氣を付けて。厭惱ます程ならば重ねての軍
に二の足踏まんは必定。是非此の所に喰止
めて。一合戦とぞ申しける。母上睨んで
ヤイ小癩者。四つた今意見した其の舌も
引かぬに御前とも憚らぬ利發だてなそれな
んぞ。兄と云うても大事な長平殿。武勇
といひ年かさお事に習ひ給ふべきか。假
初ながら大事の所彼方の下知に任せてるや
と。睥めつけ給へば又太郎年に足らぬ正行
殿此の所にて戦はんとは。勇あつて頼もし
しさり乍ら。味方は貴殿と某只二人。追
手の勢一千餘騎。死物狂はそは知らず勝つ
べき道理更になしと。言はせも果てずア、
さな宣ひそ。無勢なりとて戦はずんば戦ふ
時節はあるべからず。父正成は三百騎に足
らぬ小勢にて。十萬騎の敵を幾度か破りた
り。軍は奇正變化にあり。時はや寅の一點
我計略をめぐらさば。千騎は愚か何萬騎
も。厭破つて見せ申さんと廣言はけば母
上。エ、小面憎や童なら童のやうにして
るや。出るまゝの軍法だてサア味方二人
で。千騎の敵に勝つべき智略があらば言う
て見や。道理が悪いと正成の子ではないぞ
サア。申せと問ひかけられ。詞さん
候總じて子供の諍にも。強きは弱きを侮
つて油断の眞をするものなり。君落人の御
身にて御供とても一兩人。千騎に餘る追手
の兵多勢を頼みに油断するは必定。我等と
長年兩人は向ふの松原に隠れ入り。母上
は君の御供して。天神の社に忍び。上を始
め各下着の小袖を脱いで。裏表一幅に
解き放し。本社末社の鉦の緒ともに大旗小
旗の尺に切り。石を括つて森の梢此所彼所
に投げかけ。敵寄せ来るとも静まり返
つてほのく明けの朝風の。霧のひまぐ
森の木蔭に。旗の手のひらりくとひらめ
くを小勢と見る者あるべきか。一番に侮つ
て油断したる追手の勢。と胸を衝いて色め
く所を神樂堂の大大鼓。亂聲に打ち給はば
先陣より崩れ立ち。後陣も共に亂るべし其
の時我々小松原より横合に切つて出で。十
方無盡に切散らさば。陣を割られし敗軍の
踏留つたる例なし。多勢却つて柳となり人

にて人をせき塞がれ。同土打友打度を失ひ
八方へ逃散つて。味方の勝利正行が掌に
握つたり。フシ母上。如何にと言ひければ。

いやく／＼それも一圖の軍法。若し又敵の
大勢が此の森へはかゝらず。汝が籠る松原

へ先にかゝらば如何せん。母、其の時こ
そ松原の泊り鳥を追立てん。明けぬ先より

立つ鳥は歸雁列を亂るなる。隠し勢と心得
取つて返して此の森へ。かゝる時には彼の

手段鳥と旗とに威されて。中に漂ふ寄手の
真中只一甌に踏散すは。蚊を殺すより猶易

く骨を折らすの勝軍。案の内に候と申し上
ぐれば天皇も。あつばれ正成が子なりけり

末頼もしき若者やと。忝くも感涙に御衣を
絞らせ給ひければ。又太郎は卅五歳十一歳

の正行に。今日の大將軍御下知に任せ候
と。手を束ねたる武士の、フシ弓矢の禮こそ

正しけれ。母は悦びテ、出来したく。
總じて大將は必ず弓矢を帯する物。母が

其の心にて持つたるは長刀ならず。是を見

よと精を取れば弦を外せし村重藤。お事を
慕ふ忙しき籠負ふ間もなかりしぞ。薄なり

とも押切つて鈍矢射るは軍神の祭ぞやと。
弦袋添へてたびければ取つて頂きあれあ

れ。追手の松明近付きたり夜明とて程も
なし。母上は我が君を社の森へ御供あれ。

敵は小勢と侮るとも味方は必ず大敵とて
恐るゝ事あるべからず。何萬騎寄するとも

亂るゝ迄は音するなど。下知する聲も若絳
松原指して三度へ入りにけり。フシ追手の大

將、山口入道嫡子八郎久國。二男九郎宗
重其の勢一千餘騎揉みに揉んで馳せ來り。

此の松原こそ怪しけれいうても二人か三
人か。叢の蟲を取るより易かるべし骨折つ

て何かせん。松明を踏みしめし松原をおつ
取巻き。しめ寄せて討取れと、禰所に正

行長年。木の根を揺り梢を動かし弓の鋒に
て驚かせば。驚かされて數萬の鳥聲を立て

鳴騒ぐ。山口親子大きに驚き。堀の鳥の
俄に騒ぐは。此の松原に天皇方の軍兵隠れ

るに極つたり。地ふかく／＼と近付き寄り
切立てられては悪しかりなんと。大將を始

め諸軍勢進み兼ねて控へたる。童心の楠
が智恵一つに廻されて。一千餘騎の兵の

とまぐれ亂れ狼狽し。智略の程ぞ恐ろし
き。山口入道聲をかけ。あれ／＼東も白

みたり天神の森に陣を取り。備を立てて攻
寄せん。いざ來いと見渡せば。こは如何に。

朝霧深き森の木の間色々の旗。飄り。嵐
に靡く有様は只花紅葉の如くなり。南無三

寶前にも敵後にも敵。いづくに命を選れん
と。大將始め諸軍勢。具足願ひのがたく／＼

がたフシ鳴子を引くに異ならず。地合圖を違
へず神樂太鼓どう／＼と打つ聲に。そりや

攻鼓なう楠やと主は下人の後に屈み。子は
親を楯にして腰を抜かし氣を失ひ。逃げ惑

ふ真中へ名和又太郎長年。楠帯刀正行と名
乗りかけ。刺り立ておん廻し火水に。なれ

とぞ三度へ戦ひける。フシ藤病神に。地眼も
眩み二人を千騎萬騎と見て。逃足落足深田

に踏込み岩根に乗りかけ。我が打物にて死するもあり片時が間に手負死人三百餘騎。生きたる者は落失せて残り少々に成りければ。矢攻にせよと山口兄弟。森に向つて立並び矢種を惜まず射かけたり。味方には弓一張矢は一本もなかりしに。正行思案し刈捨てたる稻かき集め。五尺ばかりに束ね上げ社人の烏帽子淨衣を着せ。木の間にそつと立てければ。すは天皇よ餘すなと。指取り引取りさんくゝに射る矢先。藁人形に止まつてフシ針を植ゑたる如くにて。味方の矢種と成りたりし幼心に孔明が。昔を耳に觸れつらん。フシ頓智の程こそやさしけれ。地エ、目出たしと又太郎矢をかなぐつて大音あけ。いかに寄手の人々。早天よりのお出随分馳走申せとて。新田殿の御意を受け本間孫四郎。鏑矢少々持参せり何なくとも賞翫あれと。地矢つぎはやに射かけしは。嵐に雪の飛ぶ如く面に立つたる山口兄弟。弓手右手へ射伏せられ一陣白け

てさつと引く。所を。正行親子打物かざし。きたなし返せと追つかくれば。山口入道隙間を見て。女中やらぬとむんずと抱く。正行すかさず上帯揃んで宙に差上げ。地急いやつと井出の深みの泥水へフシ眞逆様にぞ打込んだる。地残る軍兵恐れをなし四方へばつと散亂し近付く敵こそなかりけれ。軍の手合せ門出よしと勝鬨の聲太鼓の聲。松に神樂の千代萬歳と君を馬に瀾し奉る。長年は項羽が勇。正行は孫子が智母が教は孟母が仁。これ大將の智仁勇。合せて三つの三吉野や。吉野の内裡に御幸なる。

第五

地神風や御裳澄川の流絶えせぬ神國のしるし。後醍醐の天皇楠正行が守護によつて。吉野山に皇居あり新田義貞馳せ参じ。都造りと聞えしかば北の方勾當の内侍。千草の頭の中將洞院左衛門督心を合せ。三種の神寶内裡に残り給ひしを盗出し奉り。神輿寶剣は内侍の身につけ参らせ。小山田が妻御供すれば内侍所の璽の御箱。頭の中將左衛門督兩人擔ひ奉り。人眼忍べば是も亦畫をばなんと烏羽玉の。夜道に同じ山陰や。フシ三輪の里にぞ着き給ふ。地鳥居の前なる御手洗の水舟石に御箱を据ゑ。内侍は寶劍を神木の杉にかけ。暫し休らひ給ふ處に覆面したる男子。同じ出立十人許り道端に蹲ひ。我々は近邊の土民ども。今度天皇様吉野山に入らせられ。新田殿楠殿内裡を吉野に御造營なさるゝに就き。天照太神より傳りたる内侍所様と申す御寶を。只今吉野へ御供遊ばす由。お公家様のお身にて御太儀千萬。まだ是より廿四五里中々御足つゞくまじ。地賤しき下々の身ながらも日本の地に住む冥加のため。其の御箱を吉野迄肩に載せ申し度し。息をかけるも恐れに存じ。皆々覆面致し垢離を取り身を清め候。仰付けられかすと。フシ思ひ入つてぞ申しける。地兩人聞き給ひ扱々奇特の志。これこそ内侍所璽の御箱とて。天照太神の御魂御影

の映りし御鏡。地汝等が肩にかゝらせ給ふ事よくも冥加に叶ひたる。果報の者ども有難く存じ。擔ひ送り奉れと宜ふ處へ。六尺豊の大男も覆面眼ばかり出し。我等も當所の百姓冥加のため賣の御箱。吉野迄昇き申し度し。鼻息かくるも恐れに存じ覆面も致したり。御許し下されと望めば兩人。

ヲ、望みの者は幾人にも其の身の祈禱昇き奉れとありければ。ハア有難し。これ其處な衆先肩でも後肩でも。いづれも寄つて片はななきれ。片はなは我等一人吉野迄同道。先へ着いて覆面取り近付になるべし。道中萬事申し合せう。サア地來いと言ひければ各ひそく叫いて。いや其の方が相肩に我々は成るまい。こつちの組へ渡すかさなくば其の方一人か。いか様とも好き次第知らぬ者同士交る事は。此の方はいやぢやいやぢやと言ひ放す。ヤア珍しい。知らぬ者同士相肩いやとは錢を取る出駕籠ぢや

同じ事。どうも我等一分立たぬ。嫌ふには様子であらうそれを聞かうと理窟つめ。アア小むつかしい何の様子。見た處お手前は人間外れの丈高島。肩が合はぬによつての事どうでもならぬと言ひければ。ム、聞えた。肩が合はずば昇くまいお供すれば同じ事。地サア皆寄つて昇き奉れと。引つ添うて我等はお供と身拵へするを見て。いやいや所詮此の方構はぬ。供なりと昇きなりと。汝がざんまい皆来いくと立歸るヤア遣らぬくと道中に。大手を擴げ跨んばたかり。拙者と同道いやがるは面こそ見えね。大方それと知つたな。尤々御所梯と遊梯とは皮剥かいでも知れるもの。これ見よ和田の新發意源秀といふ御所梯と。覆面を取つて捨て毘沙門立にすつく立ち。ヤアうぬは坊門の宰相梯。可憐や生れはよけれども。持なし悪さに遊梯に劣つたな。公家ならば公家のやうに梯本の流を汲み。腰折歌

地身にも熱せぬ武家交り
柄出會ひしは。地汝等が因果の木まぶり梢

終に及に刺通され。串梯とならん笑止さよ
とッかんら〜とぞ笑ひける。宰相覆面
取つて捨てエ、口惜しや。勾當の内侍を
大森彦七盛長に授けんと。契約せしを己れ
に邪魔を入れられ。天皇を押籠め尊氏より
恩賞を受けんとすれば。あの尼めに奪はれ
今又三種の神器を奪ひ。尊氏公へ奉らんと
欲する所。又妨ぐる推參者は程迄仕込み
し事。本意を遂げで置く可きか。下り坂の
楠新田に與せんより速に乗つたる。尊氏公
に從へ取次せんと言ひければ。源秀大口
開いてかつら〜と笑ひ。ヤイ尊氏は名大
將。うぬらが様なる不忠の臣温かな用ひら
れんや。天子に向つて弓引く朝敵の名を恐
れ。後伏見院第二の宮量仁親王を御位に立
て。吉野の内裡は後醍醐の天皇。京の内裡
は新帝と崇の義貞とも和睦し。一家の交り
元の如くあり度き願ひ。玄憲法印を以て奏
聞ある。内奏の爲只今某吉野殿へ。參る折

に残つて烏の餌食エドとならんより。熟柿首の
すり落し踏潰つぶしてくれんと。飛んでかゝれ
ば下人ども一度にはらりと取廻し。圓ヤア
奇怪くわいなる雜言。己れこそ赤面あかづの熟柿坊主。

踏潰して退けんと弓手右手より取付けば。

ム、ウ此の源秀を熟柿とな。熟柿にたかる

眼白めじろども。地拵ぢぢり殺して見せうかと引寄せ

て片端より。首筋擱おんで一締しめてはかつ

ばと投げ。締めては投げつけ。投げつけ

宰相に飛んでかゝれば敵たかはじと、フシ山を指

して逃けて行く。地源秀餘さじいつ迄か。

身は遁るべき三輪の山オクリ、拾原ひらをへ別け

て追ひかくる、フシ二人の女中。地公家達も

何事が起りしぞ所は三輪の御神前。是は神

代の御寶守りめも盡き給ふかや。神力を添

へ給へと、エテあわて給ふぞ道理なる。地か

かる所に大森彦七盛長。手勢引具しどつと

断寄せ。年來心を盡したる内侍はあれよ。

先づ生公なま家ばらひつ括くれ。承ると引伏せ引

伏せ、フシ二人に繩をぞかけたけり。地扱

其の櫃びは心得ず何かある明けて見よと。い
ふより早く郎等ども御箱に縋れば。兩人涙
を流し聲を上げ。やれ情なや勿體なや。そ
れこそ忝かたじけくも我が國の御寶内侍所。十善の
御身にさへ拜み給ふこと叶はず。不淨無禮
の手を觸れんとは忽ち眼くらんで。立疎たちみ
に死なんあさましや。情なや其處立退けと
泣き給へど。地扱事をかしい神かみより情い軍
神の。眞先かける兵になんの討といふまゝ、
地からけの布を切解きき蓋を取れば恐ろ
しや。コハリ御箱の内鳴動して電光でんぱう。天地に
輝き神鏡。朝日のナホス登るが如く、フシ虚空
に。上らせ給ひける。近付いたる雜兵ども
忽ち悶絶血を吐いて。仰向おほむかに反つて死して
けり。地無道の盛長ちつとも恐れず。よし
くさはらぬ神に祟りなし。心をかけし女
を連れて歸るばかりに。討も祟りもあるべ
きかと走り寄つて内侍を。引つ立てんとす
る所に。地杉に懸けたる寶劍の鞘を離れて
及およぶの光。天に輝き地に鳴渡り盛長が頭かぶの

上。閃きかゝり追廻おしく。劍の刃やいば風
の。三重逃ぐるを追うて、千早振る寶壇も越
えて逃げて行く、フシ吉野の敷使北畠の准后
親房卿。新田義貞楠正行三種の三祇。御迎
ひに來り給ひしが。三輪山の震動何事か
と。急ぎ駈付けこはそも如何にと驚き騒
ぎ。兩人の繩を解き給へば内侍は夢の心地
にて。小山田が妻の情にて逢ひ見る今の嬉
しさと。盛長宰相が惡逆詳しく語り、フシ嬉
し泣きこそ道理なれ。地足利尊氏三社の神
の靈夢蒙り。吉野殿へ參らんと此の所に行
きかゝり。驚き給へば新田楠すは大將と大
將との。相手づくぞと身構へして既に危く
見えし所に。地和田の新發意宰相が首提け
ア、これく粗忽こせまいと。眞中へ駈入
り。先づ惡人一人は滅びしと。首投出し義
貞に向ひ。尊氏朝敵の科を、醜みにくし申すた
め。量仁親王を御位に立て京の内裡と崇
め。御醍醐の天皇を吉野の内裡と敬ひ。新
田足利和陸して帝みかどを守護せしむべきとの願

ひ。玄憲法印の取次我等其の御使と。申す詞の中より白雲棚引き異香薫じ。杉の梢にかゝりしは不思議なりける次第なり。兩賣童子の御相好。妙なる御聲あざやかに。地天に二つの日なし地に二人の王なし。量

仁親王に新帝の位を授け。後醍醐の天皇は院の御所と仰ぎ。帝都は尊氏はを固め。吉野の都は義貞守護し奉れとの神教なり。我が國三つの賣のあらん限りは。國富み民も豊かにて敵する者のあるべきか。寶劍の威徳疑ふ事なかれと宣ふ所に。有難くも寶劍は盛長が首を刺貫き。虚空に閃き歸らせ給ひ。元の鞘に納りしは。有難。かりける次第なり。見よ。悪魔降伏の寶劍は勇神聖は智。我内侍所は仁の鏡。智仁勇の三寶も佛法僧と王法の。民安全に守るべしと御託宣のうちよりも。御形は鏡と現じ内侍の袖に移らせ給ふ。天下一統源氏一統太平國に太平の。君が威光は萬々盛治まる。御代こそ久しけれ。

七行大字直の正本とあざむく類板世に有といへ共又うつし成故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし

全く予が直之正本にあらす故に今此本は山本九兵衛治重新に七行大字の板を彫て直之正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

吉野都女楠

竹本筑後掾

竹本
博教

京二條通寺町西江入町 山本九兵衛版
大阪高麗橋壹丁目出店 正本屋 山本九右衛門版 印